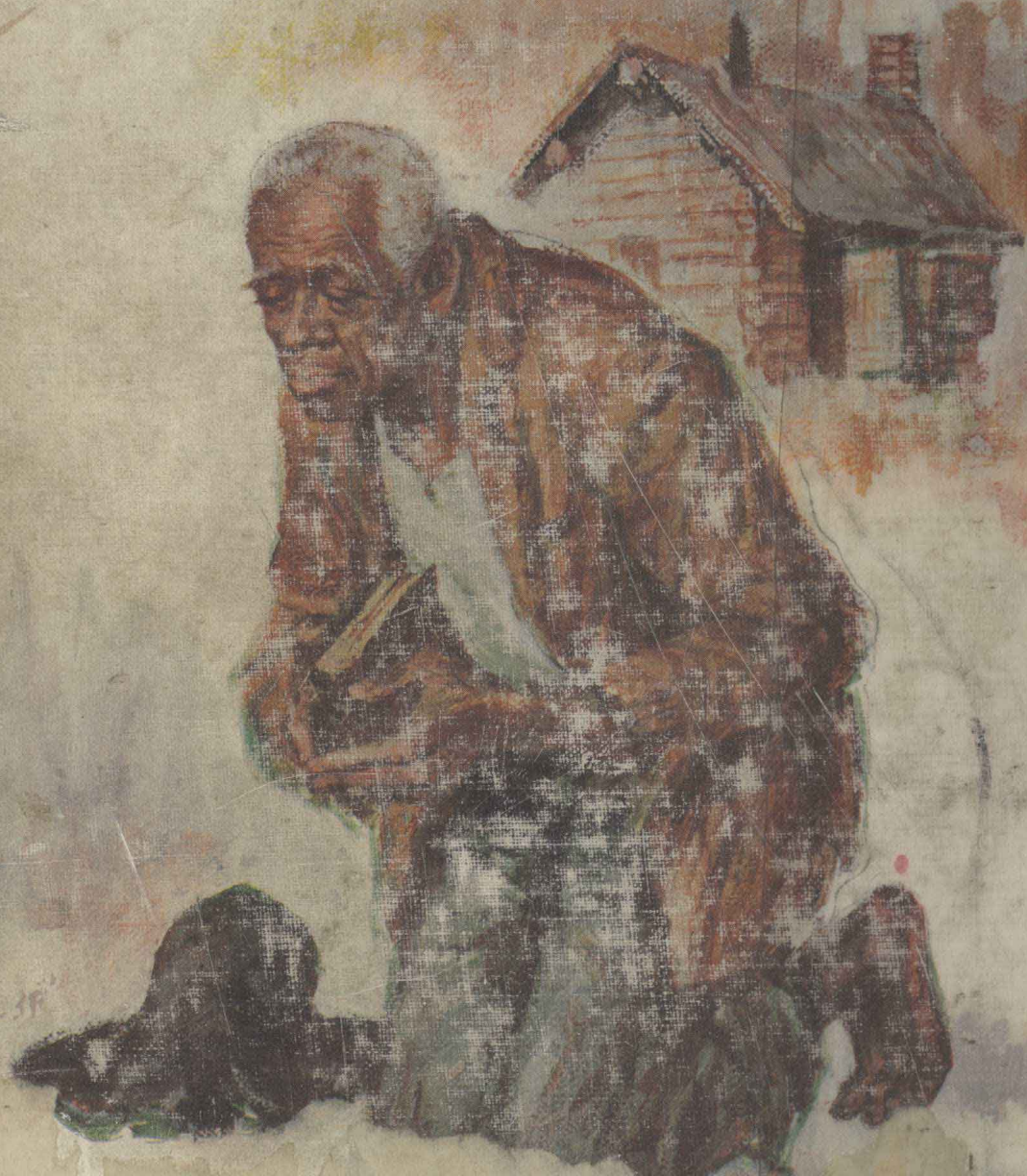


ポプラ社版／世界の名著 32

アンクルトムの小屋

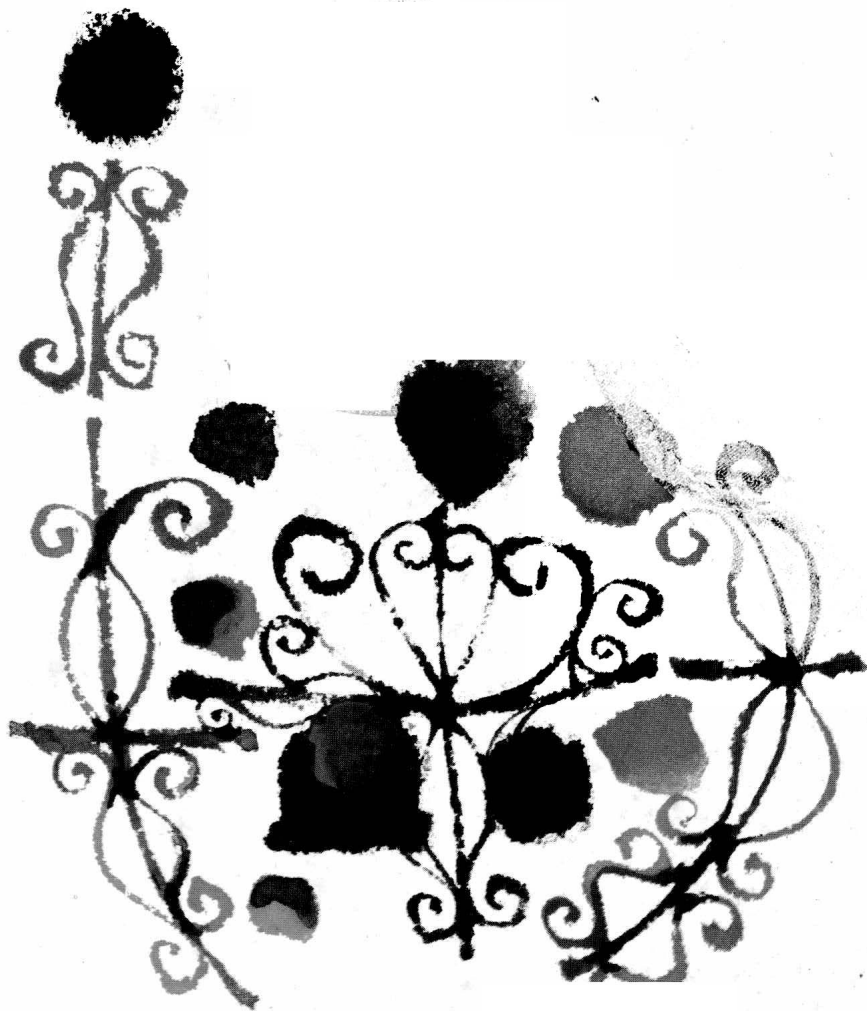
ハリエット＝ストウ 中山知子訳



ポプラ社版／世界の名著 32

アンクルトムの小屋

ハリエット＝ストウ 中山知子訳



ストウ, ハリエット

アングル＝トムの小屋

ハリエット＝ストウ作 中山知子訳

ポプラ社 昭和46 (1971)

338p 23cm (世界の名著 32)

〔分類〕 933

訳者略歴

1926年、東京に生まれ、日本女子大学を卒業。
日本児童文芸家協会会員。1958年から読売新聞
に童話を発表。以来児童文学の創作および海外
作品の研究紹介につとめる。おもな著書には短
編『ヒナギク』、長編『星の木の葉』など。翻
訳では『O・ヘンリー名作全集』、バウム『オ
ズの魔法使い』、ソンマーフェルト『ぼくの名
はパブロ』、ディヤング『白ネコの冒険旅行』
など、他に訳詞作詞が多数ある。

訳者との話
し合いに
よ
り
検
印
廃
止

世界の名著・32

.....
アングル＝トムの小屋 550円
.....

著者・ハリエット＝ストウ

訳者・中山知子
なかやまともこ

発行・昭和46年9月30日 ©

発行者・久保田忠夫

発行所・株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271番

(郵便番号160)

印刷・新興印刷製本株式会社

製本・石井製本工場

(落丁・乱丁本はいつでもお取りかえいたします)

も
く
じ





13	クエーカー教徒の村	121
12	船旅	107
11	ひとつの人権	95
10	わかれ	85
9	上院議員の心意気	71
8	にげ道	63
7	母のたたかい	49
6	発覚	41
5	売られたものの悲しみ	33
4	丸太小屋の夕暮れ	25
3	夫として父として	19
2	若い母	15
1	どれい商人	7



26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
ワタ	サイモン・レグリー	競	見すてられた人々	永遠の国へ	小さな伝道師	しのびよる影	ケンタッキーのたより	トプシー	ミス・オフィリア	正当防衛	新しい主人とその家族	エバンジェリン
煙の夜		売										
.....												
260	253	244	233	220	211	201	195	182	170	157	139	131



解 説

333

27 キャシー……………269

28 のろわれた男……………281

29 光と闇と……………292

30 幽霊……………301

31 若だんなの外套……………310

32 結末……………321

装てい 難 波 淳 郎
箱・口絵
さし絵
武部 本 一 郎

アンクル
||
トムの
小屋

中^{なか}ハ
山^{やま}リ
知^しエ
子^こツ
訳^{やく}ト
ウ

UNCLE TOM'S CABIN (1852)

Harriet B. Stowe

Ⅰ どれい商人

二月のある寒い午後おそく、ケンタッキー州P町の、ある家のりっぱな食堂で、ふたりの紳士が酒を飲んでいた。人ばらいをしたのだろう、給仕の召使は見えず、ふたりはいすを近よせて、なにか深刻に話しあっている。

とはいってもかたほうは、どうも紳士といえる種類の人間ではなさそうだ。顔つきはいやしく、背の低いずんぐりした男で、ことさらそりかえった態度には、他人をおしのけてでも出世をしたがる性根が見える。はでなチョッキをつけ、首には青地に黄の水玉のハンカチ、けばけばしいネクタイ、というめかしがたが、そんな男にうってつけの感じた。ふしくれたった大きな手には指輪をいくつもはめ、おもそうな金の時計鎖には、ばかに大きな色さまざまな印形のたばをつけていて、話に熱中すると、それをがちゃがちゃならすくせがある。しゃべりかたときたら、文法などそっちのけで、きくほうがはずかしくなるほど下品なことばづかいが、ちょいちょいまじる。

だが、相手のシェルビー氏は、いかにも紳士らしい人だ。ひと目見れば、家のようす、暮らしむぎ、そしてよい家族にかこまれた生活が想像できる。

「わたしとしては、これで話をきめたいのだがね。」

と、シェルビー氏がいった。すると相手はグラスをあかりにかざしながら、

「そんな取り引きはできませんな。ぜったいできませんや。」

「どうしてだね、ヘイリー。まったくの話、トムはとびきりのやつだよ。どこへ出したって、それぐらいの金で売れるはずだ。まじめで正直で腕はたつ。わたしの農場全体を、きちんと管理しているだけのことはあるのだ。」

ヘイリーはブランデーをぐっと飲みほして、

「やれやれ、黒んぼうを正直だとはねえ。」

「いや、ほんとうなのだ。トムは善人で忠実で、ものの道理のわかる信心ぶかい男だ。四年ほどまえ、野外礼拝にいったのがきっかけで、キリスト教信者になったのだからね。あの信心は、ほんものだと思う。それらしい、わたしはトムを信用して、金のこと、家のこと、馬のこと、なんでもまかせてあるのだ。」

そうだ、去年の秋、わたしのかわりにシンシナチまで使いにやったことがあった。五百ドルの金をもって帰るよう、いつけたのだ。ヘトム、わたしはキリスト教徒としておまえを信用しているからね」といって出してやった。トムはちゃんと帰ってきた。それを見て、よくない連中が、ヘトム、おまえどうしてカナダへにげちまわなかったんだい？」ときいた。するとトムは、へだんなさまが信用してくださってるだけに、そんなことはできねえだよ」とこたえたそうだ。

トムとわかれるのは、しんそこ、つらい。せめて、このトムだけで、借金なのこりを帳消しにしてくれていいと思うがねえ、ヘイリー、きみにも良心があるのなら。」

「そりゃあ、あつしだって、商人としてぎりぎりの良心ぐらいはもってますよ。だから、ほかならぬあんたのためなら、なんとしてもしてあげたいですがね。だが、それにしたって、たったひとりの黒んぼうですませ

ろったって、そりゃちとむりですな。」

「では、きみは、どんな取り引きなら気がすむのかね？」

「トムのおまけとして、つけてもらえるような、小僧でも小娘でもいいが、子どもはおもちじゃありませんかね？」

「うーん、そういう余分なはないねえ。じつをいうなら、売る気になったのも、よくよくのことなのだ。なじみの使用人を、ひとりだって手ばなしたくないものか。これがほんとうの気持ちなのだよ。」

そのときドアがあいて、四・五歳ぐらいの混血の男の子がはいってきた。おや、と思うほど、きれいでかわい子だ。絹のような黒い髪が、つやつやしたまき毛になって、まるっこい、えくぼのあるほおにかかり、長いまつげの下から、黒い大きな目が、あかるく、人なつっこく、ものめずらしそうに、こっちをのぞいている。赤と黄の格子の服が、よくからだにあって、浅黒い顔だちを、くっきりひきたたせている。ちょっとはにかみながらも、にこにこしているのは、いつも、だんなさまにかわいがられている証拠だ。

「やあ、ジム・クロウ（ミッドステル・ショウの黒人楽団の当時の人気歌手）！」

シエルビー氏はひゅーっと口笛を吹いて、ほしブドウをひとつかみ、ほうってやった。

「うまくうけてごらん、それっ！」

子どもは、ごほうびを追っかけて、いっしょうけんめい、かけまわった。だんなさまは笑って、「ここへおいで、ジム・クロウ。」

子どもがそばへくると、だんなさまは頭をなでてやって、

「さあこんどは、おどってうたって、うまいところをひとつ、お客さまに見せてあげなさい。」



すると男の子は、ゆたかなすんだ声でうたいはじめた。黒人仲間こくじんなかまでよくうたわれる、そうぞうしい、ふざけた歌だ。うたいながら手足てあしを動かし、ひょこひょこからだじゆうをくねらせる。それがちゃんとリズムにのっている。

「ほう、うまいもんだ！　こりゃたいした子ですなあ！」

ヘイリーは、四つぎりのオレンジをひときれ、なげてやって、「この子はものになる。うけあいだ。つまりですな。」と、だしぬけに、シェルビーしるべい氏の肩かたをたたいた。「この子の値段ねだんをきめて、それで、けりをつけようじゃありませんか。さあさあ、こんなおあつらえむきの手を使わないなんて法ほうはありませんやね！」

このとき、ドアがそつとあいて、若い混血こんけつの女がはいってきた。二十五歳きいぐらいだ。ひと目で、男の子の母親ははおやだとわかる。黒い目は子どもとそっくり、表情ひようじようゆたかで、まつげも長い。絹きぬのような黒い髪かみも、やわらかくちぢれている。

赤らめた顔が、ヘイリーのぶえんりよな目つきで見つめられて、ますます赤くなった。

「どうしたね、イライザ？」

「すみません、ハリーをさがしてましたんです、だんなさま。」

男の子は、母親にとびついていって、服のすそに集めたホシブドウを見せた。

「そうか。じゃあ、そっちへつれてっておくれ。」

イライザは子どもをだきあげて、いそいで出ていった。

商人は、ひざをのりだした。

「ちかいますぜ、こりゃあ、ものになるよ、あんた。あの娘をオルリーonzへもってきやあ、ひと財産つくれますぜ。」

シエルビー氏は、そっけなくこたえた。

「わたしはあの娘を金にかえる気はないね。」

そして話題をかえようと、新しい酒びんの口をあけて、相手にすすめ、味はどうかとたずねた。だが商人は、

「とびきりだ。一級品ですな！」

というなり、なれなれしくも、シエルビー氏の肩をほんとたたいて、

「さっそくだが、あの娘、いくらで売りますかね？」

「ヘイリー君、あれは売りものではないのだ。だいいち家内が手ばなさんだろう。たとえあの娘の目方とおなじだけの金貨とひきかえであろうともね。」

「わかってますとも！ 女ってものは、いつだってそんなこというもんだ。金かんじょうなぞ、わかつちや

いねえんだから。ちょっと金がありゃあ、時計だの羽根だの首かざりだの、どれくらい買えるか見せてやるこった。いっぺんに考えがかわっちまいますさあ。」

「やめたまえ。だめだといったらだめだ。」

「そうですか。だが、あの子どもは、こっちへよこしてもらわなくちゃね。」

「あの子を、どうしようというのだね？」

「なあに、あっしの友だちで、きれいな男の子を買って、どれい市場へ出して高く売ろうってやつがいるんです。金持ちに売りつけてもいいね、なにしろ、ああいうのは家のかざりにゃあもってこいだからね。ドア係にもいいし、給仕に使ったって、身のまわりの世話に使ったっていいね。おもしろい小僧だし、芸も達人だし、もってこいでさ。」

シェルビー氏は考えこんだ。

「あの子は売りたくないね。子どもを母親からひきはなすなんて、わたしとしては見るにしのびないのだ。」ふたりは、しばらく、だまってクルミをつまんでいた。

やがて、ヘイリーがいった。

「そんなら、どうしますかね？」

「ともかく話をつけよう。これから家内にも相談しなくてはならないからね。ところでヘイリー、きみが、おだやかにことをはこびたいのなら、人に知られないようにしなくちゃならない。黒人たちにさとられると、まずいことになる。これは、はっきりいっておくよ。」

「がってんでさあ。だけどね、あっしはいそいでるんだ。あてにできることなら、できるだけはやくきめて

もらいたいもんですな。」

ヘイリーは、立ちあがって、外套がいのうを着た。シエルビー氏はこたえた。

「では今夜こんや、六時から七時のあいだに、きてくれたまえ。そのときに返事へんじをしよう。」

商人しょうじんは出ていった。

シエルビー氏は、戸口とぐちがすっかりしまったのをたしかめると、ひとりごとをいった。

「階段かいだんからけとばしてやってしかるべきだよ、あんなやつは。あのいいぐさはなんだ。これまでのわたしだったら、へうちの召使めしつかいは犬ではないんだぞ」といつてやるところだ。なのに、あの借金しやっきんのせいで、こんなはめになってしまった。トムを南部なんぶのどれい商人しょうじんに売るなんて。おまけにイライザの子どもまで。あいつは、こっちの弱味よわみにつけこんで、さんざん利用りようする気なのだ。」

さて、さっきイライザは、食堂しやうどうを出たとき、たしかに、商人しょうじんが、ハリーをよこせといったような気がした。ききちがいをするはずはない。胸むねがどきどきする。思わず子どもを、きつくだきしめた。子どもはおどろいて、母親ははの顔を見あげた。そのとき、おくさまに呼ばれた。

イライザは水さしをひっくりかえした。机つくえにぶつかった。おまけに、たんすから絹きぬの服ふくをもってくるようにいわれたのに、ぼんやりして、長いねまきをわたししてしまった。

「イライザ、おまえ、どこかぐあいでもわるいの？」

イライザは、ぎくつとした。「おくさま！」といったなり、涙なみだがあふれてきて、いすにくずれこんで、しくしくと泣なきだした。

「おくさま、わたし、商人しょうじんが、だんなさまに話してるのを、きいてしまいました。」

「そうなの。おばかさんね。それでなにか、気をまわしたのね。」

「ああ、おくさま。だんなさまが、まさか、わたしのハリーを売りなざるなんて、そんなことがあるでしょうか？」

「あの子を売る、ですって？ そんなばかな！ だんなさまが、南部のどれい商人なんかと取り引きをなさったりするもんですか。それに、よく働いてくれる召使を売るようなかたではないでしょう、わかっているじゃないの。おまえのハリーを、だれかが買ったがってるとでもいうの？ そりゃ親ばかというものよ。さあさ、元気を出して。わたしの服のホックをかけておくれ。それから髪をね、このあいだ教えたように、うしろでむすんでおくれ。もう、立ちぎきなんかするんじゃないよ。」

「はい。でも、おくさま。もしだんなさまがそんなことをおっしゃっても、おくさまは、ご承知なさらないでしょうね？」

「あたりまえよ、承知なんかするもんですか。そんなことするぐらいなら、わたし、自分の子どもを売るほうがましだわ。でもねイライザ、どうもおまえは、あの子を自慢しすぎるようね。それで、あの子を買いにきたなんて、考えたのよね。」

おくさまのたのもしきことばに、イライザはほっと安心した。そして、器用な手つきで、てきばきと、お手つだいをしていううちに、さっきの不安など、笑いとはしてしまった。

シェルビー夫人は、夫の苦しい立場を、まったく知らなかった。だから、心から信じて、イライザの心配をうちつけたのだった。